

## 独思録：「皆既日食と政権交代」(7/26)

小西 秀俊

[esq-info@esquare-kamakura.net](mailto:esq-info@esquare-kamakura.net)

3年待った衆院総選挙より、46年ぶりの皆既日食に国民の目が奪われた7月22日、まだ居座っていた梅雨前線の影響で、多くの人々が残念な結果に終わった1日でもありました。

しかし、遠路皆既日食ツアーに集った人々は、天に向かって怒りをぶつけることなく、真昼の闇夜を貴重な体験として語っていました。

皆既日食が今度見られるのが2035年9月2日、場所は北陸や北関東だそうです。

しかし、この天来ショー、違う形で2012年5月21日に、九州から関東の太平洋側の地域で見られます。金環食ですが今回雨に祟られた方々には慰めとなるでしょうか。

金冠食は月が地球から最遠、もしくは、かなり離れているとき、見かけ上太陽が月より大きく見え完全に隠れず、太陽の周辺部が月の周りからはみだして炎リング状に見える現象です。

ところで、金冠食（金冠蝕）といえば、石川達三の『金環蝕』を思い出します。発音だけで、全く日食には関係ありませんが。

確か、九頭竜ダム落札にからむ汚職事件が、自民党の総裁選挙を端に発して露見し、池田勇人首相が退陣、佐藤栄作が後継首相になった経緯をモデルに書かれており、山本薩夫監督によって大映で映画にもなり、大きな話題となっています。

九頭竜ダム落札事件は、1964年10月、最高価額で入札した鹿島建設（1社のみ最低落札価額以上で入札）が落札し、情報誌『マスコミ』（言論時代社刊）の掲載記事「謎の政治献金5億円、九頭竜ダム入札に疑惑」との見出しで、電発前総裁が「在任中から鹿島からの誘惑があり、先の自民党総裁選では池田首相は巨額借金をして、穴埋めに無理をしようとしている」と発言したと書かれ、池田首相が退陣表明をした事件です。

裏では、「政財界の黒幕」、「フィクサー」と呼ばれた児玉誉士夫が蠢き、池田前首相秘書官事務取扱の大蔵省証券局課長補が自宅官舎屋上からの転落死事故が起きた事件です。衆院決算委員会において言論時代社長と電発前総裁が参考人質疑で対決、会計検査院院長、法務省刑事課長は疑義があると発言しましたが、追及はそこまで、事件は皆に忘れ去られ、1966年、何もなかったように、九頭竜ダムは完成しています。

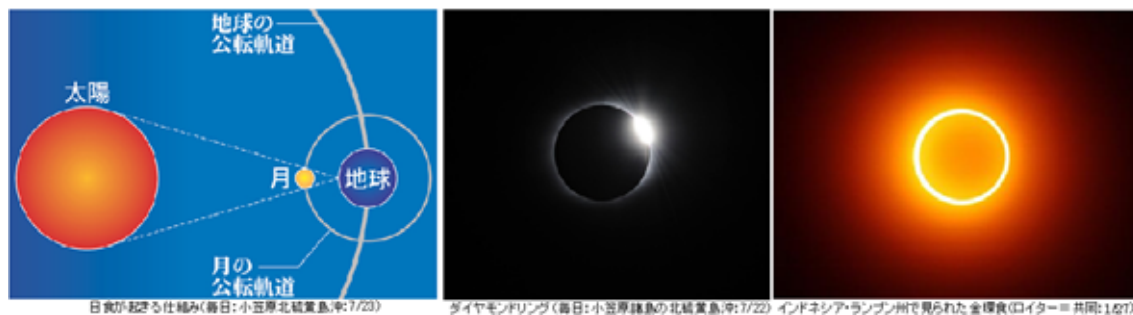
自民党の現状はというと、当時に比べ大きな政治問題は、表面上、起きてはいません。逆に、野党民主党の方が献金・政治資金の問題を抱えています。

しかし、内閣支持率・自民党支持率も最悪、通常、衆院解散の時期は、政権にとって最も勝ちやすい、比較的 support 率の高い時期に解散しています。麻生首相も昨年9月の政権発足直後は48%でしたので、今、悔やんでいるのかもしれませんが。

これまで10%台の内閣支持率で解散した事例としては、00年6月の森政権（19%）がありますが、政党支持率は、民主党の9%に対して自民党は29%と大きくリードし、

その結果、自民党は総選挙で233議席を獲得、公明党などとの連立政権を維持することができました。今回は内閣支持率と政党支持率が低い状態、ダブル・ローです。

「皆既日食と政権交代」と「金冠食（金環蝕）と政権交代（総理交代）」、何か8月30日の衆院総選挙を暗示しています。



#### <金環蝕（あらずじ）>

昭和39年夏、与党・民政党の総選挙が行なわれ、現総裁の寺田政臣総理と最大派閥の領袖・酒井和明の一騎打ちとなった。数で劣る寺田総理が率いる寺田派は党内切っ掛けの実力者で副総理・広野大悟の派閥と協調して必勝を図った。その段階において両陣営とも票集めに10億円以上の実弾を投入し、激しい選挙は僅差で寺田の三選で幕を閉じた。

数日後、金融業を営む石原参吉の元に内閣官房の西尾貞一郎が訪れ、星野康雄官房長官（寺田派）の名刺を持参したうえで秘密裏に資金の用立てを求めるが、石原はこの申し出を断る。金融王として裏の世界を渡り歩いた石原は直感的に、裏にある何らかの疑惑を感じ取り、星野の周辺を洗い出し始める。

その過程で寺田総理の郷里・九州の福流川ダム建設を目論む寺田派の有力献金企業である竹田建設と発注元の電力建設株式会社若松圭吉副総裁一派の談合と汚職の存在が浮かび上がる。

受注を目論む竹田建設は、若松副総裁を中心に、対抗馬の青山組へ発注を考える財部賢三総裁の追い落としを図り、電力開発の所轄官庁である通産省の大川大臣を通し、辞任に追い込む。その結果、新総裁に技術畑の松尾芳之助が就任。一気に流れは竹田建設へと流れ、談合の末に福龍川ダム工事を受注する。

竹田建設は謝礼として星野官房長官を通じて多額の賄賂を寺田に渡すが。

#### <石川達三（1905-1985）>

小説家。秋田県生まれ。第2高等学院卒業後英文科に進んだが1年で中退。

昭和5年（1930）ブラジル移民として渡航したが、数ヶ月で帰国。中山義秀らの「新早稲田文学」の同人となり精力的な創作活動をし、昭和10年（1935）ブラジル体験を描いた『蒼氓』で第1回芥川賞受章。昭和13年（1938）『生きてゐる兵隊』が筆禍事件を起こす。

戦後は社会派作家として次々話題作を発表すると共に、社会的な活動も広く日本文芸家協会理事長、日本ペンクラブ会長、日本文芸著作権保護同盟会長、A・A作家会議東京大会

会長を歴任。

作品に、『人間の壁』『風にそよぐ葦』『金環蝕』など。

< 山本薩夫 (1910-1983) >

映画監督。鹿児島県出身。早稲田大学文学部独文科中退。

松竹蒲田撮影所で成瀬巳喜男監督の助監督などを務め、後に東宝で監督に昇進。

戦時中は戦意高揚映画も監督する一方、極秘裏に日本共産党に入党したが、陸軍の演芸慰問部隊に招集されて、北支を転戦した。

戦後、共産党も深く関与していた東宝争議では、組合側代表格として会社と敵対し、結果レッドパージで解雇。その後は独立映画で活躍し、社会派作品を数多く世に出した。

1960年代以降は山崎豊子原作の医学会にメスを入れた『白い巨塔』や金融界の内幕を暴いた『華麗なる一族』、石川達三原作の構造汚職を摘発した『金環蝕』などの社会作を連続して手掛けた。

他に『戦争と人間』三部作、『皇帝のいない八月』『戦争と平和』『松川事件』『忍びの者』『氷点』など。



### 春秋：「皆既日食」(7/23)

ヘロドトスの「歴史」に、日食に驚いて戦争をやめた話が出てくる。小アジアでリュディアとメディアという国が合戦に及んだとき、突如として真昼が夜になった。両軍とも狼狽(ろうばい)して和平を急いだという。紀元前 585 年のことらしい。

きのう、あちこちの天体ショーを刻々と伝える映像に見入っていて、古代世界のこんな物語にも大いに納得がいった。トカラ列島も中国の上海も無情の雨。それでも不意打ちのように訪れた白昼の闇は皆既日食の神秘を実感させてあまりある。硫黄島から届いた黒い太陽と輝けるコロナの図には思わず息をのんだ。

気温もたちまち 5 度ほど下がったというから、太陽の熱と光のすさまじさを思い知る。地球に降り注ぐわずか 1 時間分の太陽エネルギーの量が、この星で 1 年間に消費するエネルギーの量を超えるのだ。これをうまく使わない手はない。化石燃料頼みの社会を大きく変え、温暖化を食い止める確かな道に違いない。

太陽はまだ 50 億年ほど燃え続けるという。人間たちの知恵比べを見て、造物主も少しは安心しておられようか。かつて戦争をやめさせるほどの力を持った日食である。今はそれに触れて地球の未来に心をはせてもいい。日本で次に皆既日食が見られるのは 26 年後。そのころ、人は天空を見上げて何を顧みるだろう。

<ヘロドトス (BC485-BC420?)>

古代ギリシア歴史家。ドーリア系ギリシア人。小アジアのハリカルナッソス(現ボドルム)生まれ。最初の歴史書『歴史』を著したことによって「歴史の父」とも呼ばれる。

ペルシア戦争後、諸国を遍歴して『歴史』(全 9 巻)を著した。『歴史』の記述はギリシアを中心にペルシア、リュディア、エジプトといった古代オリエント世界の歴史、地理まで及ぶ。ギリシアの神々の意志や神託の結果を尊重し、ギリシア人の立場から『歴史』を物語叙述で著した。

『歴史』はヨーロッパで最も古い歴史書の一つであり、現在でも古代ギリシア、古代オリエント、古代エジプトの歴史研究の上で欠かせない書物の一つとなっている。



### 天声人語：「雲よ切れてくれ」(7/23)

東京駅での目撃証言が推理の鍵になるのは、松本清張の代表作「点と線」だ。多くの列車が出入りするため、13番線ホームから15番線を見通せるのは一日で夕刻の4分のみ。名高い時刻表のトリックである。

4分とは言わない、雲よ1分だけでも切れてくれ。そんな叫びを引き連れて、国内で46年ぶりの皆既日食が南海の島々を駆け抜けた。真昼に忍び込んだ「短い夜」を大勢が体感し、はしゃぐ子どもらの目撃談は何代も語り継がれることだろう。

しかし、最長6分半の闇が待たれたトカラ列島悪石島（あくせきじま）は無情の土砂降り、434年ぶりの上海も雨。真っ暗にはなったが、ダイヤモンドリングやコロナの見せ場は厚い雲に阻まれ、見物ではなく観測に赴いた通たちを泣かせた。

その日その時、太陽と月と地球の「点と線」は確かに奇跡を演じてみせた。他方、雲は時刻表のない列車のごとし。雲なりの理屈で広がり、天体ショーや人の都合にお構いなく空を覆った。

気まぐれな停滞前線は、落胆どころか悲劇も呼ぶ。山口県の豪雨は死者・不明17人の惨事となった。7時間に1カ月分が降った防府市では、土石流が老人施設を襲った。ひとつながりの天気図が、ある所で歓声を、別の地で嗚咽（おえつ）をもたらず。

きょうは大暑。満ちる夏を、芥川龍之介は 兎（うさぎ）も片耳垂るる大暑かな と詠んだ。すべてがだらりとする酷暑の候に、不意の大雨が見舞う。一部で早々に明けた梅雨も、全国的には長っ尻らしい。ほとんど何ごともなく終わった東京の曇天を仰ぎつつ、自然の御しがたさを思う。

< 松本清張 (1909-1992) >

小説家。広島県広島市で生まれ。日本共産党の熱心な支持者。

高等小学校卒業後、川北電気に就職、その後、高崎印刷所で石版画工になる。



1939年朝日新聞広告部に意匠係として勤め、1950年、勤務中に書いた処女作「西郷札」が『週刊朝日』の「百万人の小説」に入選、1953年に「或る『小倉日記』伝」が第28回芥川賞を受賞。以後作家活動に専念。

犯罪の動機を重視した「社会派推理小説」とよばれる作品により「清張ブーム」を引き起こし、推理小説を大衆に開放することに成功した。

作品に、『点と線』『眼の壁』『かげろう絵図』『古代史擬』『火の路』『眩人』『昭和史発掘』『日本の黒い霧』『砂の器』『Dの複合』『ゼロの焦点』など多数。

<芥川龍之介（1892-1927）>

小説家。号は澄江堂主人、俳号は我鬼。東京市京橋区入船町生まれ。東京帝大英文科卒。

在学中の大正 3 年（1914）に一高同期の菊池寛・久米正雄らと共に同人誌『新思潮』（第 3 次）を刊行。大正 5 年（1916）第 4 次『新思潮』の創刊号に掲載の「鼻」を漱石が絶賛。



同年 12 月より海軍機関学校の嘱託教官（担当は英語）勤めるかたわら初の短編集『羅生門』を刊行。大正 7 年（1918）3 月、教職を辞し大阪毎日新聞社に入社、創作に専念する。

その作品の多くは短編で、「芋粥」「藪の中」「地獄変」「歯車」など、『今昔物語集』『宇治拾遺物語』などの古典から題材をとったものが多い。また、「蜘蛛の糸」「杜子春」など、童話も書いている。

### 編集手帳：「ダイヤモンドリング」(7/23)

婚約指輪を交換する習わしはヨーロッパの中世貴族にはじまる。浮気心を起こさぬ証しに、互いの心臓を縛り合った。心臓の実物は縛れないので、“出先機関”の指を縛ったという。

西洋史学者、木村尚三郎さんの「色めがね西洋草紙」(ダイヤモンド社)からの受け売りだが、その方面で社交的な人のなかには、心臓の縛り合いと聞いてギョツとした方もおられよう。

皆既日食の「ダイヤモンドリング」をテレビで見た。思えば、人に生きる力を与える陽光は酸素と栄養分を運ぶ動脈に、疲労と悲しみを癒やす月光は老廃物と二酸化炭素を流し去る静脈に似ている。太陽と月は天の高みをつかの間の指輪で飾り、人間にどんな約束を告げたのだろう。

前回46年前前に観測されたとき、宇宙飛行士の毛利衛さんは北海道・余市の高校1年生だった。当日は体育祭で、学校を休むことを先生は許してくれない。さぼって網走に行き、日食を見た。のちに眠りの夢に、何度も真珠色のコロナが現れたという。

ぼくは天文学者になる、わたしは宇宙飛行士になる…。きのう、約束の指輪を夏空と交わした少年少女もいただろう。

<木村尚三郎(1930-2006)>

西洋史学者。東京都出身。東京大学文学部西洋史学科卒。東京大学名誉教授。

専門はヨーロッパ史、特に中世フランスの荘園の研究。

1975年『ヨーロッパとの対話』で、第50回日本エッセイスト・クラブ賞を受賞。

日欧の比較文明論や文明史に係わるエッセイを新聞雑誌に多数執筆。NHK教育テレビのN響アワーの司会を、なかにし礼、芥川也寸志と三人で務め、ヨーロッパ的な洒脱な教養人として知られた。2005年愛知万博で総合プロデューサー。

著書に、『歴史の発見』『組織の時代』『ヨーロッパとの対話』『人類文化史 5 西欧文明の原像』『世界戦史 99 の謎』『近代の神話』『色めがね西洋草子』など多数。



<毛利衛(1948-)>

宇宙飛行士。北海道出身。宇宙航空研究開発機構(JAXA)東京工業大学大学院総合理工学研究科連携教授。北海道大学大学院化学専攻、修士。南オーストラリア州立フリンダース大学大学院理学部化学専攻、博士。専門は真空表面科学、核融合炉壁材料、宇宙実験。

1992年9月と2000年2月の2度スペースシャトルエンデバー搭乗。

著書に『毛利衛、ふわっと宇宙へ』『宇宙実験レポート from U.S.A. スペースシャトル



エンデバーの旅』『地球星の詩』『宇宙の風 50 歳からの再挑戦』『宇宙からの贈りもの』など。

### 余禄：「送り梅雨の災害」(7/23)

硫黄島からのテレビ中継ではみごとな天空の王冠（コロナ）を見せた皆既日食だった。だがトカラ列島などの皆既帯では厚い雨雲に観測を阻まれたところが多い。部分食を見られると期待した東京でも曇天の明暗に空想をたくましくするしかなかった。

すでに梅雨明けが宣言された南九州や関東甲信地方だが、「戻り梅雨」の空模様である。今夏は太平洋高気圧の張り出しが弱く、梅雨前線の停滞が続く西日本では「暴れ梅雨」ともいわれる梅雨末期の集中豪雨に見舞われる地域が相次いだ。

山口県防府市では21日午前中に7月1カ月の平均雨量に当たる230ミリ以上の豪雨となった。この雨による土石流が特別養護老人ホームを襲い、入居していたお年寄りが亡くなったり、行方不明になった。他の地区でも被害が続出している。

ニュース映像では多くの車いすが泥に埋もれた惨状を見せる老人ホーム内だ。裏山からの土石流は昼食後のホームになだれ込み、体の不自由なお年寄りをのみこんだ。空からの映像を見れば、赤茶けた土石流の跡が山頂からまるで円形の建物をめざして流れ落ちたかのように続く。

以前から土砂災害の警戒地域に指定されていたこの土地だ。最近の水路工事からみ土石流の不安を訴える声があったとの報道も聞く。同じような条件の施設は少なくないだけに、惨事を防ぐすべがなかったかどうか十分な検証を求めたい。

梅雨明け近くの豪雨には「送り梅雨」という言葉もある。早く梅雨を送り出したい気持ちをうかがわせる季語だが、人の思い通りにならないのが天気である。前線はなお列島付近にとどまる見通しで、まだまだ用心を緩められない。

#### < 送り梅雨 >

梅雨が明けころの雨。強くたくさん降ることが多く、雷を伴うこともある。梅雨の末期には梅雨前線が陸地の上で活動するので大雨や集中豪雨が起こりやすい。

### 毎日：「山口豪雨：3人の遺体発見 死者8人、行方不明者9人に」(7/22)

山口県の豪雨災害で、県警と消防などは22日早朝から防府、美祿、下関、岩国4市の現場で行方不明者の捜索を実施。死者・行方不明7人を出した防府市真尾の特別養護老人ホーム「ライフケア高砂」で新たに入居者の山本信和さん（63）と中村マサ子さん（92）、下関市で行方不明になっていた農業、太田欣典（よしのり）さん（74）が遺体で見つかった。



また岩国市で70代の男性が行方不明になっていることが分かり、これで死者は8人、行方不明者は9人となった。

県によると、県内では午後3時現在、住家全壊、半壊各1棟、一部破損10棟、床上浸水88棟、床下浸水469棟。また山口市や防府市などで約3万戸が断水している。